

大学 DX 勉強会の歩みと展望 — 10 回から見えてきたこと

小林 久美子^{1),2)}, 吉田 浩^{1),2)}, 八重樫 理人³⁾, 近堂 徹⁴⁾,
玉造 潤史⁵⁾, 柏崎 礼生⁶⁾, 合田 憲人^{1),2)}

- 1) 国立情報学研究所 クラウド基盤研究開発センター
- 2) 国立情報学研究所 クラウド支援室
- 3) 香川大学 情報化推進統合拠点 DX 推進研究センター
- 4) 広島大学 情報メディア教育研究センター
- 5) 東京大学 情報システム本部
- 6) 近畿大学 情報学研究所

cobak@nii.ac.jp

University Digital Transformation (DX) Workshops: Insights from Ten Events

Kumiko Kobayashi^{1),2)}, Hiroshi Yoshida^{1),2)}, Rihito Yaegashi³⁾, Tohru Kondo⁴⁾,
Junji Tamatsukuri⁵⁾, Hiroki Kashiwazaki⁶⁾, Kento Aida^{1),2)}

- 1) Center for Cloud Research and Development, National Institute of Informatics
- 2) Cloud Promotion Office, National Institute of Informatics
- 3) DX Research Center, Integrated Center for Informatics, Kagawa University
- 4) Information Media Center, Hiroshima University
- 5) Division for Information and Communication Systems, the University of Tokyo
- 6) Cyber Informatics Research Institute, Kindai University

概要

国立情報学研究所クラウド支援室では「大学 DX 勉強会」を開催し、実際に大学で DX を推進している現場の方々の取り組み紹介とそれをもとにした情報交換、さらに、参加者全員での議論を通して大学 DX 推進に向けた課題を共有している。本稿では、これまで 10 回開催した本勉強会から見えてきたことを整理し、今後について展望する。

1 はじめに

2020 年前後から、多くの大学では、研究、教育、事務のデジタルトランスフォーメーション (DX) が加速したが、その経験や知見について情報交換する場は 2023 年初頭ではまだ限られていた。

大学 DX 勉強会 [1] (以下、本勉強会) は、筆者ら企画チームメンバーが中心となり、実際に大学で DX を推進しているマネジメントから現場までさまざまな立場からの取り組みを紹介し、それをもとにした情報交換と参加者全員での議論を通して大学 DX 推進に向けた課題を共有、さらに参加者、特に現場担当者のモチベーション向上に寄与することを目指して 2023 年 3 月に始まった。その後、2024 年度からは学認クラウド導入支援サービス [2] の一環として進めている。これ

は、DX の実現にあたってはクラウドサービスの利用が不可欠であり、クラウドの利用動向も既存 IT の移行から DX を含む高度な利用へと変化してきたという状況認識に基づいている。本勉強会は 2025 年 8 月に第 10 回が開催され、これまでの参加者数はオンラインを含め延べ 2000 人を超えている。本稿では、これまでの 10 回から見えてきたことを整理し、今後について展望する。

2 大学 DX 勉強会

本勉強会の開催形態は、他イベントの一環として企画・運営し、NII は主催あるいは協力組織として参画するなどの開催形態を毎回模索してきた。構成としては、前半が大学 DX に関する報告、後半が登壇者を含めたパネルディスカッション、Slido による聴衆参加

表1 大学 DX 勉強会の開催実績

回	登壇数		参加者数			時間(分)	イベント
	大学	事業者	オンサイト	オンライン	合計		
1	5	-	70	243	313	120	広大クラウドシンポ 2023
2	4	-	28	156	184	90	NII オープンフォーラム 2023
3	4	-	110	-	110	90	AXIES2023 年次大会
4	4	-	83	177	260	150	広大クラウドシンポ 2024
5	3	-	50	317	421	90	NII オープンフォーラム 2024
6	2	2	80	-	80	120	CloudWeek2024 @北大
7	2	1	200	-	200	90	AXIES2024 年次大会
8	2	2	78	185	263	150	広大クラウドシンポ 2025
9	2	1	55	205	260	90	NII オープンフォーラム 2025
10	3	1	61	112	173	120	CloudWeek2025 @北大

表2 アンケート1：DX 推進の課題

質問	回答選択肢（複数回答可）
DX 推進の課題（今何で困っているか）をあげてください	何をやればよいか分からない
	人手不足
	人材の教育・育成
	学内利用者に対するサポート
	上層部の理解がない
	DX 推進予算の確保
	その他

型のリアルタイムアンケートと質疑応答、となっているが、開催形態や時間の都合で後半部分は適宜省略される場合もある。10 回までの開催実績を表 1 に示す。

第 1 回と第 2 回については [3] で報告しているが、第 1 回は実際に大学で DX を推進している現場の当事者から取り組みについて報告し、議論した。事後アンケート結果より大学 DX を進めるための検討課題として、「学内マネジメント層によるトップダウンの推進」「学内利用者・関係者の理解・協力」「DX 推進の中心となる人材」の 3 つが挙げられたため、第 2 回はこれら 3 つの検討課題の当事者（大学経営層、ミドルマネジメント層、現場層）の視点から実際の DX の取り組みについて報告し、議論した。その結果、大学 DX を進めるための検討課題の 1 つとして「異なる層（大学経営層、ミドルマネジメント層、現場層）がそれぞれ求める情報の提供」が挙げられたため、第 3 回以降もこの異なる層からの視点で実際の DX の取り組みについて報告および議論することになった。

また、第 1 回の始まりと終わりに表 2 のアンケート

1 を行ったところ、図 1 のように終わりの「何をやればよいか分からない」の回答割合が大きく減ったことから、DX 推進について本勉強会参加後の「何をやればよいか分からない」を減らすこと、参加者に元気になって帰ってもらうことを目標にした。以下では第 3 回以降見えてきたことを整理する。

2.1 第 3 回

第 3 回は 2023 年 12 月に AXIES2023 年度年次大会において AXIES クラウド部会のセッション（一般発表）としてオンサイト開催された。

前半は、当日の発表順で、4 大学（香川大学、島根大学、信州大学、大阪教育大学）の 5 名が、大学経営層、ミドルマネジメント層・現場層の当事者の視点から実際の DX の取り組みについて報告した。また、「大学 DX に取り組むために重要なこと」について議論した。当日は以下のような発言があった。

- 業務をするのではなく業務を通じて正しいデータを生成する、泥臭い議論・後戻りしない。

始めと終わりの回答比較

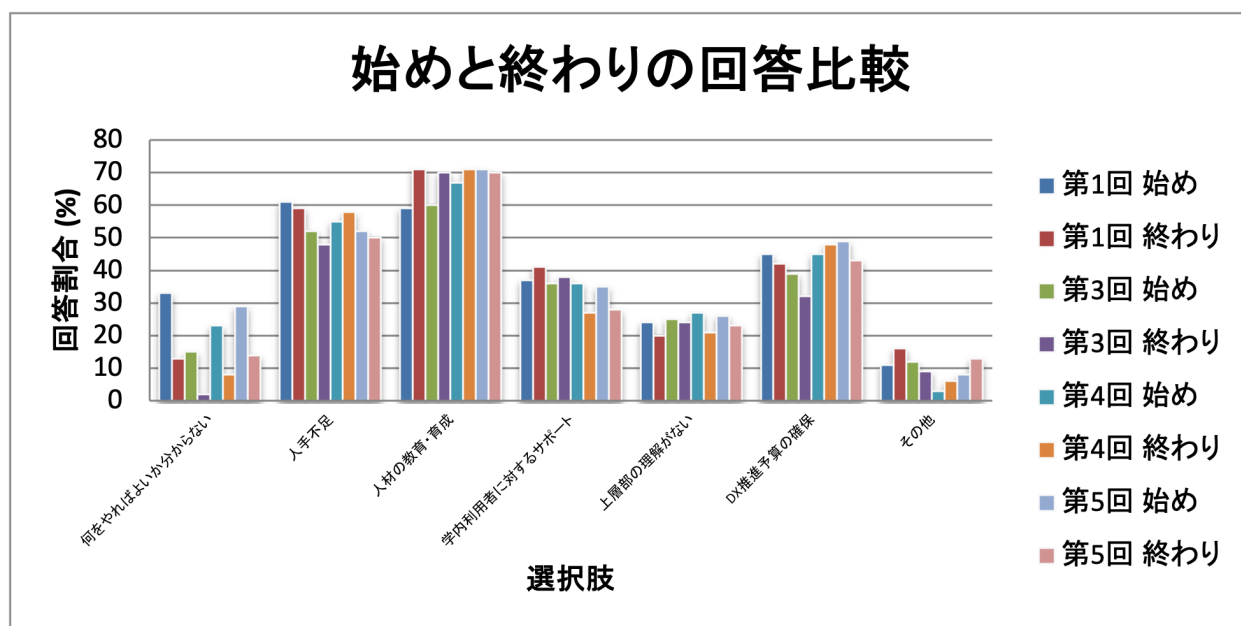


図1 アンケート1：DX推進の課題の結果

- 大学DXが進むことによって、大学が良い方向に進むと信じること。
- 関係者との認識あわせ、業務の見直しにつなげていく。部署間での調整が大事。
- まずはやってみる、基本形は同じで派生開発で対応できそう、丁寧な調整が必要。

以上より、経営層、ミドルマネジメント層・現場層が同じ方向性を向きつつ、それを部署間の連携に広げていくこと、大学が良い方向に進むと信じて泥臭い議論を関係者の間で行うこと、あまり心配しなくても事務業務はかなりの部分が派生で開発できそうだが丁寧な調整をすること、が重要であると言える。また、アンケート結果から今回も終わりの「何をやらねばよいか分からない」の回答割合が大きく減ったことが確認できた。(図1の第3回)

2.2 第4回

第4回は2024年3月に広島大学の大学等におけるクラウドサービス利用シンポジウム2024においてハイブリッド開催された。

前半は、当日の発表順で、4大学(鹿児島大学、広島市立大学、筑波大学、広島大学)の8名が、大学経営層、ミドルマネジメント層・現場層の当事者の視点から実際のDXの取り組みについて報告した。また、「大学DXに取り組むために重要なこと」について議論した。当日は以下のような発言があった。

- 分野の異なる教員を巻き込んで全学的な視野で取

り組むことが大事。

- 大学全体で取り組める枠組みを作り、取り組みができるところから徐々に取り組んでいく。
- 大学側は本気を示す、失敗してもいい環境、仲間を作ること、情報発信すること。
- DXの機運を醸成すること、ポリシーを定めること、取り組みを継続すること。

以上より、経営層、ミドルマネジメント層・現場が同じ方向性を向く全学的な視野を持つこと、大学の本気を示すこと、全体ではなく、できるところから段階的に取り組むこと、が重要であると言える。また、アンケート結果から今回も終わりの「何をやらねばよいか分からない」の回答割合が大きく減ったことが確認できた。(図1の第4回)

2.3 第5回

第5回は2024年6月にNII学術情報基盤オープンフォーラム2024においてハイブリッド開催された。

前半は、当日の発表順で、3大学(弘前大学、三重大学、成城大学)の4名が、大学経営層、ミドルマネジメント層、現場層の当事者の視点から実際のDXの取り組みについて報告した。また、「大学DXに取り組むために重要なこと」について議論した。当日は以下のような発言があった。

- 情報インフラ整備や情報セキュリティについても適切に対応すること、DXを所掌する専門組織を整備する予定。

表3 アンケート2：事業者に期待する分野/大学に提供したい分野

質問	回答選択肢（複数回答可）
【大学・研究機関向け】 大学 DX を推進する上で、今後事業者の支援・参画を期待する分野は何でしょうか？ 【事業者向け】 大学 DX を推進する上で、今後大学に重点的に提供したい分野は何でしょうか？	調査
	企画
	設計
	構築
	運用・保守
	その他

- 有能な人材を発掘し、俗人化させず組織的に取り組むこと。
- 失敗してもやってみること、楽しみながらやること、DX を着こなせる人材になること。

以上より、DX だけではなく情報インフラ整備やセキュリティも必要であること、みんなが自立した DX 人材になること、大学が連携して DX にあたること、失敗してもやってみよう、楽しみながらやってみようという雰囲気が大事であること、が重要であると言える。また、アンケート結果から今回も終わりの「何をやればよいか分からない」の回答割合が大きく減ったことが確認できた。（図1の第5回）

2.4 第6回

第6回は2024年9月に Cloud-Week2024@Hokkaido University において AXIES クラウド部会企画セッションとしてオンサイト開催された。

「大学 DX を推進する上でベンダーとの関係はどうあるべきか」を議論するために、今回から事業者も登壇することになった。前半は、当日の発表順で、2 大学（名古屋工業大学、東京大学）の 2 名と 2 事業者（北海道総合通信網株式会社、株式会社 Fusic）の 2 名が、大学と事業者の視点から実際の DX の取り組みについて報告し、議論した。当日は以下のような発言があった。

- システムの共同開発・運用をそろそろ検討しないといけないのではないかな。
- 大学間に共通するニーズを見出して動いて欲しい、大学独自の組織文化・組織風土に理解を。
- DX 推進にむけて安定的なインフラ整備は必要不可欠、運用はお任せしていただき大学は教育研究に専念を。
- DX 推進にむけた伴走／共創の取り組みを実施す

るため予算確保する前から相談役として活用を。

以上より、現場が欲しいといっても経営層にも説明できるようにすること、大学とベンダーでシステムの共同開発・運用をそろそろ本格的に考えること、最後は熱量、が重要であると言える。

また、第6回からは表3のアンケート2を行った。大学・研究機関の結果を図2、事業者の結果を図3に示す。全体傾向として、大学・研究機関は構築や保守・運用への期待が高いのに対して、事業者は企画や設計の段階からサービスを提供したいと考えていることが分かる。

大学 DX を推進する上でベンダーの協力は不可欠なことから、第7回以降もこの大学と事業者の視点で実際の DX の取り組みについて報告および議論することになった。

2.5 第7回

第7回は2024年12月に AXIES2024 年度年次大会において AXIES 部会企画セッションとしてオンサイト開催された。

前半は、当日の発表順で、2 大学（琉球大学、東海国立大学機構）の 2 名と 1 事業者（株式会社早稲田大学アカデミックソリューション）の 1 名が、大学と事業者の視点から実際の DX の取り組みについて報告し、「大学 DX 推進にむけた課題」「大学 DX 推進にむけたベンダーの役割」について議論した。当日は以下のような発言があった。

- 目的・取り組みに対する評価・取り組みスタイルの明確化、取り組み成果の共有、業務 DX から教育・研究 DX へ展開。
- AI 時代に活躍できる人材育成。
- 各組織の状況にあわせた自走化ジャーニーの支援。

大学・研究機関(第6回～第8回)

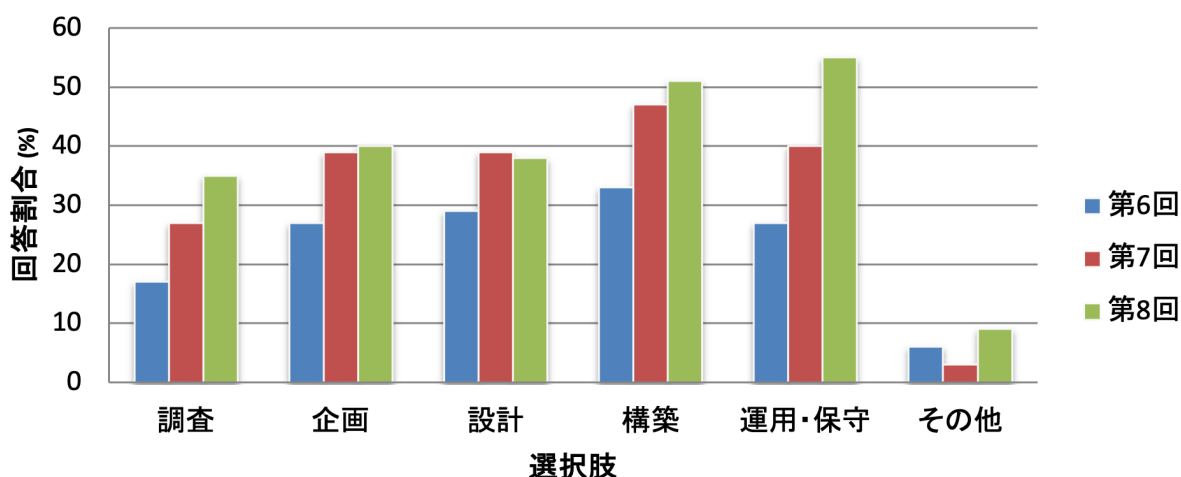


図2 アンケート3：事業者に期待する分野

事業者(第6回～第8回)

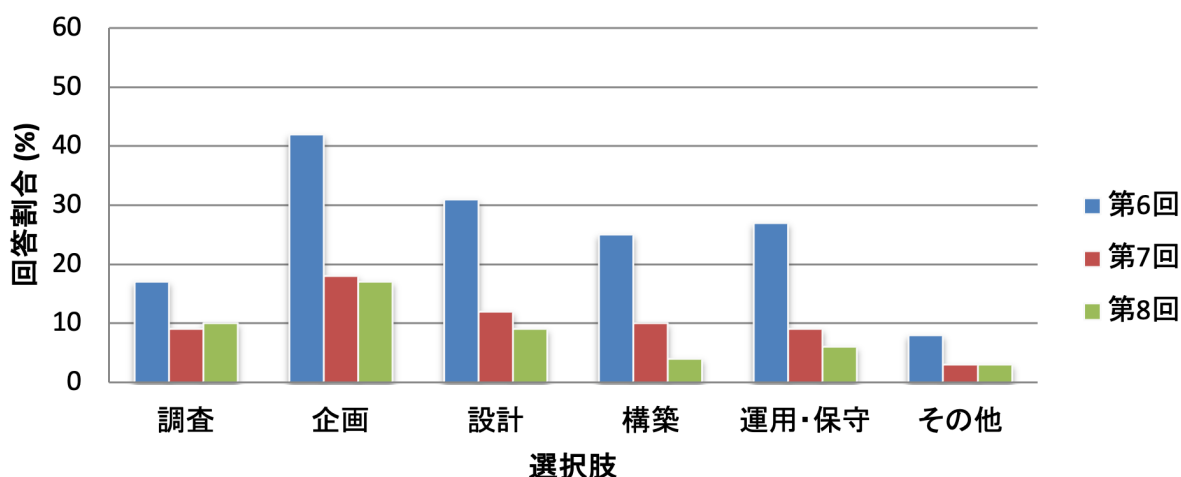


図3 アンケート3：大学に提供したい分野の結果

以上より、経営層は自大学の将来を見据えあるべき姿（組織、構成員）を語ることに、従来とは異なる手法を用いることにも積極的にチャレンジすること、抵抗勢力がいるのは仕方ないがそれらとの共存も視野に入れること、が重要であると言える。

2.6 第8回

第8回は2025年3月に広島大学の大学等におけるクラウドサービス利用シンポジウム2025においてハイブリッド開催された。

前半は、当日の発表順で、3大学（愛媛大学、高知県立大学、同志社大学）の5名と2事業者（西日本電信電話株式会社、株式会社SibaService）の3名が、大学と事業者の視点から実際のDXの取り組みについて報告し、「大学DX推進にむけた課題」「大学DX推進にむけたベンダーの役割」について議論した。当日は以下のような発言があった。

- 人材は地域で育てて地域で採用、大学の戦略や中

表4 アンケート3：事業者にして欲しいこと/大学を支援したいこと

質問	回答選択肢（複数回答可）
【大学・研究機関向け】 大学 DX を推進する上で、今後事業者にして欲しいことは何でしょうか？	現状分析、課題の抽出
	戦略・方針立案への参画
【事業者向け】 大学 DX を推進する上で、今後大学を支援したいことは何でしょうか？	技術動向・業界動向の提供
	課題解決に向けた IT 活用の提案
	システム設計・構築への参画
	その他

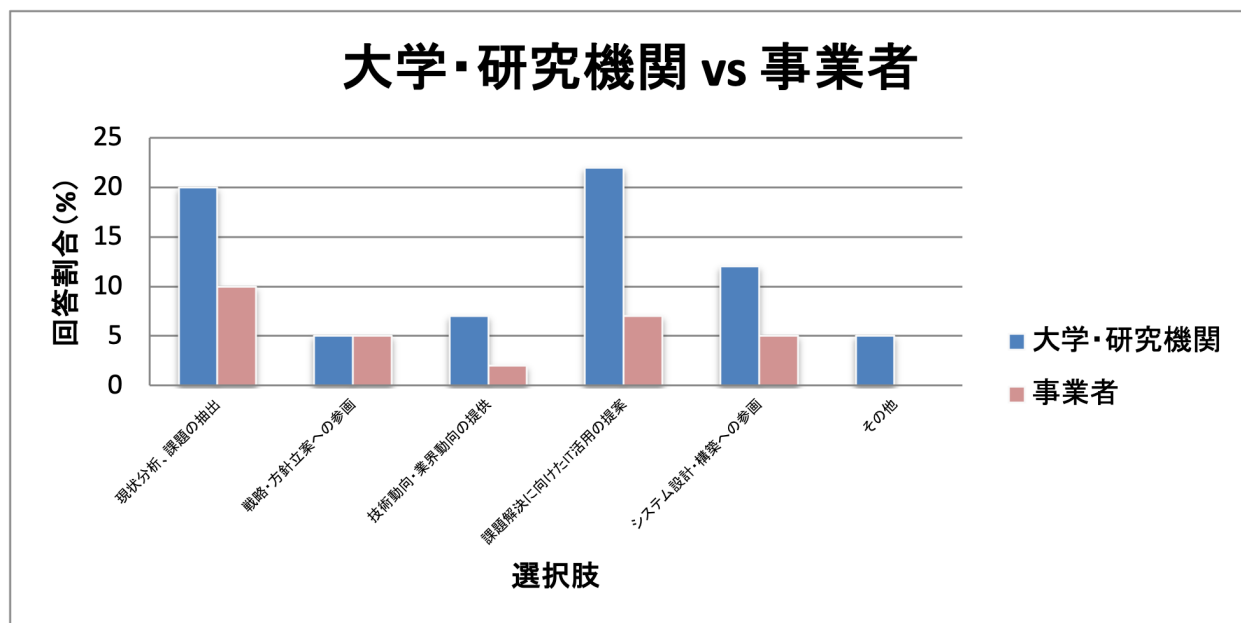


図4 アンケート3：事業者にして欲しいこと/大学を支援したいことの結果

期目標・中期計画の中身も意識してほしい。

- フラットな組織づくりや副次的な効果もある、求めているのはサザエさんの三河屋さん。
- 若手の人材育成の機会としても有効に作用している、他大学等の情報についても共有してほしい。
- 共創のパートナーとして一緒に成長して本当の意味でのパートナーになりたい。
- サービス利用者、情報発信者、管理者、ベンダー、それぞれにとって幸せなサービスでなければ運用に乗らない。

以上より、やはり人材が大事であること、ビジネス的には難しいが三河屋さんのようなサポートが必要であること、将来も見据えた戦略立案も一緒に考えることが重要であると言える。

2.7 第9回

第9回は2025年6月にNII 学術情報基盤オープンフォーラム2025においてハイブリッド開催された。

前半は、当日の発表順で、2大学（名古屋大学、東京科学大学）の2名と1事業者（富士通 Japan 株式会社）の1名が、大学と事業者の視点から実際のDXの取り組みについて報告し、「大学DX推進にむけた課題」「大学DX推進にむけたベンダーの役割」について議論した。当日は以下のような発言があった。

- デジタルを活用した新しい大学の役割の模索し、情報システム統合を通じて新しい大学の姿を作る。
- as-is から to-be を作成し自分達がわかる範囲内にシステム化は限定、技術的な解決はあとで自分たちの首をしめることになる。
- 答え・正解がない新しい価値創出領域へのアプ

ローチ、システムを超えてベンダーと大学が共通認識を持ち大学とベンダーでこれまでとは異なる新しい関係性を。

以上より、あるべき姿をステイクホルダー全体で作成・共有すること、答え・正解のない新しい価値創出の領域へアプローチすること、自分達のわかる範囲で大学主導で推進すること、が重要であると言える。

2.8 第 10 回

第 10 回は 2025 年 8 月に Cloud-Week2025@Hokkaido University において AXIES クラウド部会企画セッションとしてハイブリッド開催された。

前半は、当日の発表順で、3 大学（広島大学、北見工業大学、北海道大学）の 3 名と 1 事業者（株式会社日立コンサルティング）の 1 名が、大学と事業者の視点から実際の DX の取り組みについて報告し、「大学 DX 推進にむけた課題」「大学 DX 推進にむけた事業者の役割」について議論した。当日は以下のような発言があった。

- 現実的かつ段階的なシステムを提案し、継続的なレビューや改善提案を通じて信頼関係を醸成する。
- 大学の「しきたり」を理解したうえで適切な解決策の提示、専門的な外部の目から見た改善提案を期待。
- 学内の情報部門と連携したことが成功の要因、自分事として捉えて自ら必要知識を学ぶ。
- データ駆動型アプローチを採用すべきではないか、自分たちでなにか必要かを見極めたうえで取り組みを。

以上より、オールインワンサービスではなく現実的な段階的なシステムを導入すること、ドメイン知識を獲得しつつ大学間のしきたりは減らす方向にすること、データに基づいた大学運営や経営ができるようにすること、自分事で自分たちでなにか必要かを見極めること、が重要であると言える。

また、今回は表 4 のアンケート 3 を行った。結果を図 4 に示す。大学・研究機関と事業者の回答結果の上位 3 つは「現状分析、課題の抽出」「課題解決に向けた IT 活用の提案」「システム設計・構築への参画」と同じであった。

3 おわりに

本稿で整理したとおり、大学 DX 勉強会は大学に求められている情報を明確にするためにアンケートを実施し、その回答や議論の結果に基づいて内容を構成してきた。例えば、学内の 3 つの異なる層（経営、ミドルマネジメント、現場）それぞれの視点から報告、議論してきたところに事業者の視点が加わったことで、ステイクホルダーの関係を越えた議論、情報共有につながっている。

これまでの 10 回の開催を通じて、大学における DX 推進に関する多様な事例と知見を共有してきた。そこから見えてきたのは、DX は単なる技術導入にとどまらず、人材育成、組織文化の変革、学内外の協働、そして地域社会との連携を伴う包括的な取組みであるという点である。

今後、大学を取り巻く環境は一層厳しさを増すことが予想されるが、DX の推進は、これに対する組織の変革を加速し、教育・研究の質を高めてゆく上で不可欠であり、単独の大学（特に小規模大学）では、取り組みにも限界があるため、本勉強会を通じて新たな知見を生み出し、それを共有させてゆくことが大事であると考えている。引き続き大学 DX 勉強会を各大学の事例と知見を共有し、議論を通じてお互いに学び合う場として提供してゆきたい。

謝辞

大学 DX 勉強会にご協力いただいた方々に深く感謝いたします。

参考文献

- [1] 大学 DX 勉強会、<https://cloud.gakunin.jp/universitydx/>.
- [2] 学認クラウド導入支援サービス、<https://cloud.gakunin.jp/cas/>.
- [3] 小林ほか、大学 DX 推進に向けてのクラウド導入の課題、大学 ICT 推進協議会 2023 年度年次大会、2023 年.